

# 中国60年代と世界

第1号

2015-03-26

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〈中国60年代と世界〉研究会について…… (1) / 「下放」をどう研究するか 土屋昌明…… (3)

討論会「毛沢東時代の民間記憶とその歴史的衝撃」報告(上) …… (7)

## 発会の趣旨

## 〈中国60年代と世界〉研究会について

中国の存在は、つねに世界史に重く関わり続けてきた。私たちが生きるこの21世紀の時代も、中国の存在は巨大な影を落としている。それは今のところ、経済主義あるいはそれに付随する政治においてであり、思想的・文化的・社会的においてではない。私見では、これはおそらく歴史で例外的な状況にすぎない。なぜなら、前世紀の末までの相当長期間、中国の影響力は、経済だけでなく政治・思想・文化においても巨大だったし、これから日本の地位の相対的な低下により、そのようになる可能性が高い。過去で中国の影響力が極めて高まった時点の一つは、1960年代である。それは、文化大革命の核心時期(66～68年)をはさんだ約10年間のことをさす。

にもかかわらず、少なくとも日本では、この時期を考えようとする動向は大きくない。それは、今の日本人が中国の実力を認識する契機に至っていないからである。それゆえ日本人は、次のような心理にとどまっているように思われる。

**第一に**、今は、この時期の歴史に対してすでに認識したという思い込みがある。この時期の主たる事件である文化大革命(文革)は、今では政治家の権力闘争による流血の動乱だったとされる。流血事件のいちいち、単なる殺人事件であって、政治・思想・文化には関係ないから検討するに値しない。政治家の権力闘争については、すでに歴史家が整理を加えた定説がある。このように思い込んでいる。

**第二に**、今は、この時期の歴史に対する嫌悪感がある。この時代の中国の影響が絶大だったゆえに、

日本では中国の言説を信じこんだり、自国の文化革命や改革に利用したりする傾向が強かった。左翼思想家の多くは、中国の事象を理想視した言説によって、国内へ批判を加えた。しかし文革終結後に、それは中国のプロパガンダに騙されたにすぎないとされ、自分たちもそのように思った。彼らは、それに対して反論できない状況となり、押し黙るしかなかった。今この時代を問題として避ける心理が働くのは、こうした状況の反作用である。そこにはまた、中国共産党が1981年以来、文革を否定し続けている動向が影響している。中国共産党の文革否定とは、文革を分析した上で否定するのではなく、文革を亡き者にする否定、文革を忘却させるプロパガンダである。中国でこの圧力が強くなるにつれ、日本の知識界はその動向に無意識的に付き従っている。

**第三に**、如上の動向に抗おうとする場合、まず重要だったのは、文革の内部構造を単純化せず、丹念に分析し、文革という歴史事件を読み替えることだった。しかしこれは、あまりに忍耐力を要する作業だったので、これに耐える人物は少なかった。と言うのは、浜辺に打ち寄せる波より、退いていく波の方が人をさらう力が強いからである。文革終了後10年して、「私たちが抱いた文革のイメージ、あれはすべて虚像であったのか？文革は本当に流血と混乱のほかは何ものをももたらさなかったのか？」と問う人がいた<sup>1</sup>。その立場は、近代化革命路線とコミューン革命路線の二つの対立というシェーマで文革をとらえる枠組みから離れようとした。彼は検討の結果、文革で課題となった、国家に対する民衆の異議申し立てとしての革命の問題は、未完のまま文革

1 加々美光行『逆説としての中国革命』「はじめに」田畑書店、1986年、11頁。

の遺産となって存続していると考えた<sup>2</sup>。確かにそれは、21世紀の現在に至るまで、未完のまま存続しているといえる。その意味では、中国60年代研究の一つの重要な視点である。しかし今や、このような思考の出発点を共有すること自体がむずかしくなっている。と言うのは、「文革のイメージ」そのものがステロタイプ化され、「私たちが抱いた文革のイメージ」そのものが再現しにくくなっているばかりか、それを共有していた世代は、もはや現世から退場することの方に関心が移りつつある。経済至上主義社会に暮らす後の世代は、この共有を再現させる契機を、原発事故からすら獲得していない。

そこで私たちは、別の観点から、もっと中国に住む一般の人々に接近する方法から、世界史における60年代の問題を再考しようと考えた。如上のような観点が軸足を置いていたのは、中国60年代が世界に与えた影響を、毛沢東思想や近代化の問題ととらえる観点である。そののみを「思想」「文化」として考察したのである。その観点はもちろん重要であるが、私たちはそれをより個人・一般人に則して考えたい。かつて中国の文革を信じた人々も、毛沢東思想とヨーロッパ的近代の止揚にのみ関心を持ったわけではなかった。竹内好は、現地映像の中国人の「顔」に感激したと言う<sup>3</sup>。つまり、当時の一般人の生活を見ようとした。それは、今のインディペンデント・ドキュメンタリーの映像を見ることに接続できる。そこに見られる一般人の生活も「思想」であり「文化」なのである。そこに「共有」の端緒があるのではないだろうか。これを、如上の三つの問題に関連させて述べれば、次のようになる。

**第一に**、私たちは中国60年代の歴史が認識されているとは思わない。史料は次々と明らかになっており、欧米に移住した中国系の人々を中心とする研究も進んでいる。さらに、映像歴史学が未知だった証言や文書の存在を強烈にアピールしている。こうし

た歴史研究そのものが、中国共産党による歴史の圧殺への抗議であり、一般の人々の思想・文化である。このような動向を考慮せずに、文革は毛沢東の権力闘争だったと言って事足りるとするわけにはいかない。

**第二に**、中国共産党による60年代に関する否定そのものを研究すること。70年代後半から80年代前半にかけて行われた、右派や文革被害者への名誉回復と再評価について、それが60年代の否定のためのプロパガンダであった可能性を考察すべきである。例えば、毛沢東への個人崇拝に反対したとして逮捕された張志新の事績である。彼女は、獄中で陵辱の限りを尽くされ、毛沢東の甥の毛遠新らの判断で、1975年4月4日に喉を切られた上で死刑にされたという。1979年3月になると、今度は烈士に認定され、1979年には3ヶ月の間に新聞紙上に86篇の文章が書かれた<sup>4</sup>。しかしその後、張志新に対する関心は好ましくないものとされている。これは、文革否定のために、一時的に文革に反対した人物を宣伝に使ったのではないだろうか？

**第三に**、文革の内部構造を単純化せずに丹念に分析し、文革という歴史事件を読み替える作業を継続するとともに、視点をより個人の人生や考え方に向けること。60年代の農民・学生・労働者らは、どのような生活をしていたのか？ 60年代の生活経験によって、その後の人生を決定づけられた人々は、数多く存在したはずである。60年代の生活経験・思想と文化は、どのようにしてその後の実際生活に反映したのか？ 例えば、反右派運動で右派とされて死んだ夫の墓を探しに、甘肅の果ての夾辺溝に赴いた女性は、いったいどのような人生を歩んだのか<sup>5</sup>。そのような人生をなるべく多く認識することこそ、現在に生きる中国人に接近する方法ではなからうか。

そしてこのような方法を、中国人だけでなく、日本人にもフランス人にも向けることにより、世界に対する中国60年代の影響を考えることができる。例えば、中国60年代にクローズアップされた「下放」という教育方法を、みずから科して労働者の世界に身を投じた日本人がいる<sup>6</sup>。このような行動は、60年代の思想と文化の一種の反映にほかならない。

2 同上、101頁。

3 竹内好「夜明けの国」『世界』1967年11月、『竹内好全集』第4巻。

4 張玉洪「負面報導不是懷東西：中國新聞實踐中的真命題」106～107頁。

5 王兵監督『鳳鳴—中国の記憶』ムヴィオラ社、2013年。

6 土屋昌明『目撃！文化大革命』『紅衛兵の歩み』について 太田出版、2008年。

この事情を認識することから、中国60年代の世界史的意義の一端が理解されるのではなかろうか。そして、このような行動は、決して個人にとどまらないのであり、それは中国でも日本でも、今の社会で見るべき背景となっている。しかるに、彼ら彼女らが和光同塵をむねとして一般社会に紛れているために、この事実が人々の視野に入らず、それを世界史と結びつけて考察しようというアイデアが出なかったのである。

以上が、2016年の文化大革命発動50周年を機に、世界史的なメルクマールである中国60年代の研究を行う「〈中国60年代と世界〉研究会」を立ち上げるゆえんである。

#### 本研究会への参加について

本研究会は「〈中国60年代と世界〉研究会」と称し、これにふさわしい学術研究を進めることを旨と

して、各種の活動を行いません。研究会への参加は自由で、会費は募りません。

#### 今後の予定について

- ・ 2016年に文革発動50周年を機に、文革を再検討する活動を行いたいと思います。
- ・ これにむけて、2015年3月26日(木)を第1回として、隔月最終木曜夜に研究会を開催するように努めます。第2回は5月28日(木)、発表者は矢吹晋氏の予定。第3回は7月30日(木)、発表者は前田年昭氏の予定。
- ・ 来年までの研究会の運営と来年の文革を再検討する準備は、本研究会への参加者による「文革50周年再検討会」が担当し、その一環として編集グループが会報を発行するつもりです。

本研究会幹事

土屋昌明 (tuwu@s01.itscom.net)

第1回研究会(2015年3月26日)発表要旨

## 「下放」をどう研究するか

土屋昌明

### はじめに

従来の中国60年代の研究ないし文革の研究では、政治運動の史的展開を叙述することおよびその背後にある政治家の権力闘争を分析することに主眼があった。この観点に立って、日本における文革の受容の問題を考えると、こうした政治運動に関わる政治思想や政治的行為が日本でどのように受容されたか、という問題設定にならざるをえない。これはこれで有効な観点であるが、この点からの注視によって、生活や人生観に関わるような文革の側面が見逃される傾向がある。その一つは「下放」の問題である。

「下放」の問題は、個人の生活や人生観というより、大衆動員の観点から考えられた。しかし、中国の場合でも、「下放」によって得られた個人の生活

経験は、その個人の人生に直接間接に大きな影響を与えている。また日本では、「下放」という大衆運動は輸入されなかったから、これが個人に影響したことは、如上の視点からは問題とされてこなかった。しかし、日本における「下放」の問題は、「はだしの医者」の問題と関連して、予期以上に多数の人々に影響を与えており、しかもそれなりの実績をあげているように思われる。したがって、「下放」の問題を考えることは、60年代の生活経験が現在にまで残存したケースとして、社会史・思想史的研究に値する課題なのである。

### 「下放」という語

一般的に日本で「下放」という語は、次のように

説明されている<sup>1</sup>（傍線および連番は引用者、以下同）。

①1960年代から70年代前半に見られた、大量の都市労働者、知識青年を農村に移住させること。60年代前半の調整期に見られた下放は、大躍進の挫折がもたらした深刻な食糧危機を乗り切るため、61年に重要政策として始まる(1)。その内容は都市労働者・家族計約3000万人を強制的に農村に移住させようとしたものであった。61年1月から63年6月までに実際に都市から農村に移された人口は2600万人、食糧の消費者から生産者に転じた人口は2800万人といわれた。その後も農村に移住する下放は続いたが、自発的な志願を原則とし、さらには3-4年の下放経験後、都市に戻りたい場合は帰還は可能であった。

しかし、文化大革命期に入り下放制度は三大差異の撤廃（都市と農村、労働者と農民、知的労働と肉体労働の格差の撤廃）という理想主義的なスローガンの影響もあり、また都市部の就職難を解決する必要性からも、次第に半強制的な性格を帯び、かつ永住を強制する措置として取り組まれていった(2)。これは上山下郷運動とも呼ばれ(3)、これを通じて“新農民”となった知識青年たちは文革の新生事物として称えられた。しかし、下放した多くの青年を待ち受けていた現実には、苛酷な労働、黒五類と同様な差別的待遇、暴行・リンチといった、理想とはまったく反対の様々な迫害であった。文革後に一時期花咲いた傷痕文学と呼ばれる作品の多くは、下放知識青年の悲劇を題材としたものであった。

②上級の幹部、事務職員などを下級の機関や農村、工場などに派遣して一定の期間現場の労働に参加させ、思想を改造すること(4)。農村革命時代からの中国共産党の伝統的な幹部の工作方法として、農村に入り大衆と寝食を共にし、大衆の苦楽を肌で感じることを重視していた(5)。こうした伝統が建国以降もひき継がれ、上級幹部が農村、

工場、鉱山など基層（末端）に派遣され、ある時には直接生産現場で労働に参加し、農民・労働者に学ぶことが奨励され（五・七幹部学校など）、またある時には基層組織の幹部の工作态度、財務管理などの点検が行なわれた（四清運動など）。このように上級幹部が基層の実情を把握したり、基層のかかえている政治・経済的問題の解決を支援したり、自分の工作态度、思想をチェックすることを目的として、農村・工場など基層に赴くことを下放という。

③上級機関が保持している顕現のいくつかを下級機関に譲渡すること。（略）

また、これに関連する語彙として「上山下郷運動」がある。これについては以下の如し<sup>2</sup>。

都市の中・高校を卒業した若者（知識青年）が山村、放牧地域や農村に定住して農業、牧畜業などの生産労働に携わる運動。1956年1月中国共産党中央は、卒業後、都市で進学・就職できる者以外は、すべて「上山下郷」し、農業生産、社会主義建設に参加するように呼びかけた(6)。以後、毎年100万人規模の知識青年が農山村に定住した。文化大革命初期の紅衛兵運動と大交流のために中断したが(7)、68年12月22日「人民日報」が〈知識青年が農村に行き、貧農下層中農から再教育を受けることは大いに必要だ〉という毛沢東の最新指示を伝えると、69年1月から空前の規模の上山下郷運動が始まった。三大差異の縮小という毛の文革理念の他に、67年の大交流中止で中・高校に戻った66、67、68年卒業組《老三届》の紅衛兵たち1000万人の就職問題解決という差し迫った事情もあった。

「老三届」の80%が農村人民公社や軍系統の開墾農場である生産建設兵団などに赴いたが、武闘に疲れ、新天地に夢を求めて旅立った者も少なくなかった。78年までの10年間に延べ1623万人が農山村に定住したが、厳しい生活に耐えきれず都市にこっそり舞い戻る若者も文革後期には少なくなかった。71年の林彪事件後に大量復活した古

1 『岩波現代中国事典』1999年、144頁、天児慧稿。

2 『岩波現代中国事典』523頁、土田真靖稿。



参幹部たちが子女を呼び戻すケースも目立った。

このため73年には、知識青年への生活費補助の増額、公社員と同一労働・同一賃金の保証、幹部が「裏口」から子女を呼び戻すことの禁止、一人っ子は免除など政策の手直しも行なわれた。

76年の四人組失脚後、特に11期3中全会以降、大半の知識青年が都市に戻り上山下郷運動には終止符が打たれた。上山下郷に参加した紅衛兵世代は農村の厳しい現実を体験したため現状変革志向が強く、76年の第1次天安門事件、78—79の北京の春でも活躍、89年の第2次天安門事件では学生たちの指南役を務めた者もいた。

これらの解説を読むと、相互に食い違いがあることに気がつく。傍線(1)の説明によれば、「下放」は移住政策の一つとされているが、傍線(4)によれば、短期的な研修である。移住としての「下放」は1961年に始まり、その目的は食糧危機の克服にあった。なぜ都市から農村に移住させると食糧危機が克服できるのか？この説明によれば、移住した人々が生産者になるからである。傍線(2)によれば、「下放」は農村の生産性をあげるためだけでなく、三大差異を克服するという理念が加わった。その理念は表向きであり、実際は都市部の就職難を農村に振りあてるといった必要性があった。傍線(3)によれば、文革中の「下放」は「上山下郷」ともよばれた。

しかし、傍線(6)によれば、「上山下郷」は1956年から始まったという。傍線(7)によれば、1956年から1968年まで、文革の初期を除いて、毎年100万人が下放して農村に定住したという。文革初期の「紅衛兵運動と大交流」とは、たぶん1966年後半のことを言っていると思われるので、67年にも下放が行なわれていたということなのだろう。そうすると、約10年間で1000万人ほどの若者が都市から農村に下放したことになる。

## 「下放」の三つの側面

上の記述の問題点の考察から、「下放」の三つの側面をおさえておこう。

傍線(5)は、1942年に延安で「下郷」という語によって実践されたものを指しているのだと思われる。これは、若い幹部や知識人を短期間、農村に遣って鍛えさせる方法であった。

傍線(6)は、1956年の中央政治局の提議のことを指している<sup>3</sup>。この時は「下郷上山」という語が使われた<sup>4</sup>。これが入れ替わった「上山下郷」は、1960年くらいに登場したようである<sup>5</sup>。しかし中国政府は、すでに1955年から「下郷」の方法を全国の都市の小中学校卒業生に対して呼びかけている。この時の言い方は「農村に行こう」「下郷しよう」「上山しよう」であった。当時は、幹部や知識人を農村に遣る場合でも同様に「下郷上山」と呼ばれたようである<sup>6</sup>。1967年7月9日の『人民日報』社説の標題で「上山下郷」が使われ<sup>7</sup>、これ以降、「上山下郷」でおちついたらしい。中国人がよく使う言葉は「下郷」である。これは、都市は上にあり、農村は下にある、という言語感覚による。日本語でも都市に行くことを「上京」というが、これは古典中国語に由来する。「下郷」は日本語では熟しておらず、一般には「下放」というようである。

「農村に行く」若者には2種類がある。一つは、農村出身の若者が都市で学んだあと、農村に戻る場合。もう一つは、都市出身の若者が都市で学んだあと、農村に行く場合。1950年代に「農村に行こう」と呼びかけた実質的な対象は、前者の若者だった。後者の若者が重視されるのは、1955年に始まりはするが、60年代のことである。特に歴史的に重大なのは、68年の下郷運動である。

要するに、「下放」には歴史的な展開と意味の変容がある。ゆえに、その側面にそって研究するのが便利であろう。

第一に、延安時代に始まる、幹部や知識人に対する再教育としての側面。これは基本的には、幹部や知識人の思考や生活観が農民から遊離することを避

3 「1956年到1967年农业发展纲要」。

4 张化「试论“文化大革命”中知识青年上山下乡运动」1987年。

5 1960年2月7日『人民日報』第4版。

6 劉少奇の1958年中共八届二中全会での発言で使われている。

7 「坚持知识青年上山下乡运动的正确方向」。

けるという理念的な目的があった。これは、個人の生活や人生観に関わる問題とみなされ、「自分で自分を教育する」「泳ぎの中で泳ぎを覚える」「農村から都市を囲む」といった毛沢東思想とあいまって、実践的な意味を持った。反面、こうした理念によって政策の本質を糊塗したり、個人の洞察力を失わせたりする作用もあった。こうした点で、中国現代史における個人の動向を考える際に重要である。それほどばかりか、日本や諸外国の人々に与えた影響も大きく、本稿の冒頭に触れた性格のものでもある。

第二に、大衆運動としての側面、特に68年以後の大量の青年たちの動向である。「下放」した農村での彼らの動向や、そこでの経験や学習が彼らにもたらした事柄とその結果について考察する必要がある。この時期、青年たちの多くは、社会の底辺にいたことによって、共産党の思想・文化的なコントロールからはずれることができた。農村の現実を認識し、自己省察と独自の読書によって思想的探求ができた。彼らの思想は次第に変化をとげ、毛沢東を信奉する思想から主流イデオロギーを批判する観点へと方向転換した。上海大学の朱学勤の回想がそれを典型的に表わしている。

河南の小さな町で、一群の高卒青年労働者が、仕事の引けた後、貧困にしてかつ贅沢ともいふべき思索生活をおくっていた。……彼らは非知識人の身でありながら、正常な時代なら知識人が討論するのを常とするような諸問題を激烈に議論していた。時には、議論の末に顔をまっかにさせ、徹夜に及ぶことすらあった。そんなときに彼らの言い合いで起こされた近隣の人々は、いぶかしげな目で彼らを見たものだ……こいつら昼間はいっしょに仕事している組立工やらパイプ工やら運搬工やらが、いったん夜になるとなぜ史学や哲学や政治学の理屈を議論しはじめるんだ？<sup>8</sup>

<sup>8</sup> 朱学勤「思想史上的失踪者」徐友漁編「1966：我们那一代的回忆」北京：中国文联出版公司、1998年、321～338頁。印紅標「文革後期における青年たちの読書と思想的探求」土屋訳、『専修大学社会科学研究所月報』No. 585、2012年3月20日。

こうした下放青年のグループが「民間」の思想活動や政治活動をおこない、70年代末の天安門事件や「北京の春」が生まれる土壌となった。現在の非営利団体の活動やいわゆる「地下文化」もこの系譜上に置くことができる（インディペンデント映画はその典型的な一つである）。

第三に、人口コントロールの側面。これだけ多くの人口をコントロールし、都市から農村への人口移動を実現させ、かつ農村から都市への人口流入を抑制し得たのは、近代国家として希有のことであった。

農村から都市への人口流入は、特に発展途上国の近代化ないし経済発展・都市の安定化には必須の問題であり、中国の例を各国は注目してきたはずである。この問題が世界の諸国家の政策にどう影響してきたのかは、管見では、ほとんど研究されていないように思われる。また、中国政府がこうしたコントロールをどのように継続あるいは放棄してきたのか、「戸口」や「档案」の問題ともからみ、現代中国社会を理解する鍵でもあろう。

#### 参考文献（一部）

潘鳴嘯著、殿陽因譯『失落的一代：中國的上山下鄉運動、1968-1980』香港：中文大學出版社、2009年（Génération perdue : le mouvement d'envoi des jeunes instruits à la campagne en Chine, 1968-1980 / Michel Bonnin, Paris : Éditions des hautes études en sciences sociales, 2004）。

加々美光行「三つの世代を越えて見えて来るもの：紅衛兵世代、天安門世代、ポスト天安門世代にとっての文革」ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.7 (2) 2014  
<http://iccs.aichi-u.ac.jp/archives/report/045/53aba26a6fba3.pdf>

大野旭（楊海英）「広潤天地へ飛ばされた知識青年たち—中国・文化大革命期における人的流動と社会主義権力の表象」『ユーラシアと日本：交流と表象の現状と課題：報告書』p.89-96、2006年12月27日。  
<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/bitstream/10297/2654/1/081016001.pdf>

張英莉「新中国の戸籍管理制度（上）—戸籍管理制度の成立過程—」『埼玉学園大学紀要（経営学部篇）』第4号。  
[http://www.media.saigaku.ac.jp/download/pdf/vol4/management/03\\_zhang.pdf](http://www.media.saigaku.ac.jp/download/pdf/vol4/management/03_zhang.pdf)

（未完）

# 討論会「毛沢東時代の民間記憶とその歴史的衝撃」報告(上)

土屋昌明

フランス現代中国研究センター (Centre d'études français sur la Chine contemporaine) 主催による討論会「毛沢東時代の民間記憶とその歴史的衝撃」(Popular Memory of the Mao Era and its Impact on History)が、2014年12月15・16日にフランス・パリのサンジェルマン通り裏にある Maison suger およびフランス国際研究センター会議室で行なわれ、私も聴講したので、本会報のスペースを使って報告を記しておきたい。

この討論会は、フランス現代中国研究センターが進めるプロジェクト「毛沢東時代への新しいアプローチ」(New Approaches to the Mao Era)との協働で実施されている。テーマでわかるように、毛沢東時代の集団的記憶 (collective memory) が現代中国の動向に左右している状況を考えようとするものである。この集団的記憶を「民間記憶」(Popular Memory)と称するのは、この記憶がオフィシャルな歴史観を形成すべき記憶と対抗する傾向があるからである。今このような訳語を使ったのは、すでに中国語圏で「民間記憶」という語が使用されているからであり<sup>1</sup>、その用語を流用した。

1990年代から、いわゆる60年代の青年の下放(上山下郷)・50年代末の大飢饉や反右派闘争の記憶を記録したものが大量に行なわれており、またそれが記録文学やドキュメンタリーとなって、非公式でありながら大量に流通する事態となっている<sup>2</sup>。多くの作品は、中国国内では正式出版や正式販売ができず、いわゆる海賊版やコピーで流通している。この点で、80年代の傷痕文学がオフィシャルな歴史観に収斂されてしまったのとは相違する動向である。文

芸作品として中国国内で正式出版されているものでも、閻連科や楊顯慧の小説作品などは、当時の経験や聞き書きにもとづいたドキュメンタリーに近いもので、迫真性がある。楊顯慧の『夾辺溝記事』(2008年9月、広州：花城出版社)は、王兵監督『無言歌』(2012年)に改編されたものである。中でも、この方面でのインディペンデント・ドキュメンタリーの社会的影響力は看過できない。本会議が特に注目している監督は、胡傑と艾曉明であり、胡傑監督を招いて講演と最新作『星火』の上映があった。

本会議では、このような「民間記憶」を検討することが、中国現代史をどのように読み替えることになるのか、また「民間記憶」に対する大量のアプローチが、どのように現代中国社会に影響するのか、といった課題を討論するのが目的であった。

以下、研究発表者と題目を示す。

## 第1日 Maison suger

### 9:30~12:30 「民間」記憶の施設化

討論者：Patricia Thornton (オックスフォード大学)

① Kirk Denton (オハイオ州立大学)「中国において私設博物館は歴史を選択する余地を持つか?—四川・安仁の建川博物館」

② Daniel Leese (フライブルグ大学)「現代中国における名誉回復—北京・豊台区1978~79を例として」

③ 呉思「毛沢東時代の集団的記憶について—『炎黄春秋』を例として」

### 14:30~17:00 民間記憶の方向性

討論者：Luba Jurgenson (パリ・ソルボンヌ大学)

④ Judith Pernin (フランス現代中国研究センター、現代歴史研究所)「記憶の記録と再演—右派張先痴を撮った二つのインディペンデント・ドキュメンタリー」

⑤ Sebastian Veg (フランス現代中国研究センター、フランス高等社会科学院)「21世紀の毛沢東時代に関するフィクションと記録文学：楊顯慧、楊繼繩、

1 「香港独立電影節 2014」で「民間記憶計画」というテーマがとりあげられている。この経過を進めたのは、「中国インディペンデント・ドキュメンタリーの父」とよばれる呉文光である。呉文光「『民間記憶計画』中的大饑荒紀錄片」『二十一世紀』142、2014年4月、104~117頁。

2 フランスで特に衝撃を与えたのは、楊繼繩『墓碑：中國六十年代大饑荒紀實』のようである。本書の日本語版は、伊藤正・田口佐紀子・多田麻美訳『毛沢東大躍進秘録』東京：文藝春秋、2012年3月。

関連科]

17:30~19:00 胡傑監督『星火』上映と討論

第2日 フランス国際研究センター会議室

9:30~12:30 歴史の反省：草の根的抵抗

討論者：Lucien Bianco (フランス高等社会科学院)

⑥Jean-Philippe Béja (フランス国家科学研究センター)

「文革前の毛沢東の社会転換に対する抵抗運動：積極分子の自伝にみえる反対派組織」

⑦Frank Dikötter (香港大学)「静かなる革命」

⑧王愛和 (香港大学)「文革における非政治的芸術・個人的経験・別種の主体」

14:00~17:00 歴史学に対する民間記憶の貢献

討論者：Nicolas Werth (フランス国家科学研究センター)

⑨Michel Bonnin (フランス高等社会科学院)

「知識青年の下郷運動が突然収束したのはなぜか？ 新疆の特例はいかに解釈するか？—この課題における民間の記憶と歴史の貢献」

⑩丁東「オーラル・ヒストリーと毛沢東時代の反省」

⑪吳迪「毛沢東時代の公共記憶とその歴史的影響—オーラル・ヒストリーにおける二つの物語」

17:30~18:30円卓会議

Jean-Philippe Béja, Nicole Lapierre, Nicolas Werth

以下、個人的に関心のあった点のみ記録しておく。

①は、過去の歴史の展示を私設博物館がおこなっ

ている例について、樊建川という個人が出資した四川の安仁にある建川博物館



旧地主の邸宅に展示された文革期の彫刻。安仁博物館小鎮、2011年8月17日、土屋撮影

を中心に論

じた発表であった。私は森瑞枝氏とともに2011年夏にこの博物館に行ったが、残念ながら時間の関係で一部しか見られなかった(写真参照)。当時、この広大な敷地の博物館に文革関連の展示があるのを見て、文革研究に対する公的な抑圧と、展示あるいは消費の大規模化の相互関係にとまどいを覚えた。こ

の博物館は文革だけでなく、抗日戦争や四川大地震に関する集合的記憶も扱っている。これには、文革の展示だけを突出させない作用があると発表者はみているようであった。また、本発表はこの博物館だけでなく、中国各地の文革関連の他の展示や画廊・コレクター・私設博物館の紹介があった。またこの動向は、下放気分のレストランの繁盛や、収租院のリバイバルなどとも連関している。

②は、豊台地区の档案資料を使って、名誉回復のプロセスを個別具体的な事例で検討した研究であった。これは、胡耀邦の配下で行なわれたものであるが、名誉回復する際に、短期間に多数の人々を実地に調査して判断していることが理解できる。当局の作業量は想像を絶するほどである。これは、こうした個別具体的な事例研究を通してはじめて理解できることであろう。

③は、体制内改革派の雑誌とされる『炎黄春秋』に発表された文章が、歴史の反省に貢献したことを述べた。特に大飢饉に関する楊繼繩の論説をとりあげ、これにより大飢饉を天災とする公的メディアは少なくなったという。発表者は、この雑誌の執行主編を1996年以来勤め、少し前に辞職した吳思であり、気持ちのこもった話であった。この雑誌は、もと民間であったが、このたび教育部直轄の芸術研究院のもとに入ることになったという。

④は、1957年に反右派運動で右派とされた張先痴を撮った二つのフィルムを比較研究している。張先痴は右派として労働改造中に脱走したため拘禁が長くなり、1980年に出獄した。その後、自伝『格拉古軼事』を2007年に書いている。彼を撮ったインディペンデント・ドキュメンタリーの一つは、胡傑監督の『格拉古の書』(2013年)、もう一つは北京の邱炯炯監督の『痴』(2014)である。両者の視線は全く異なっているが、特に邱炯炯監督は張先痴の語りに、役者による舞台劇的な画面を挿入しているようである。発表の内容では、分析が表現方法の相違に偏りすぎ、両者が歴史記憶にどう迫っているかを論究する地点までいかなかったように感じられた。

紙幅が尽きたので、⑤以降は第2号にまわしたい。

(つづく)